



協力が充足しました。その期を境に、産学連携の取り組みは飛躍的に伸びてきました。この点で地域連携センターの働きは大きいと考えています。現在、企業からの相談は年間延べ500件近くあります。コーディネーターが企業へ出かけて行って相談を受けることもありますので、それを合わせると、2,000件ほどでしょうか。

杉野会長：すごいですね。

前澤学長：今はそういう状況ですので、遠慮なさらずどんどん来ていただきたい。気軽に来ていただけるよう、更に情報発信力を高めていかなければならないと考えています。

また、ある企業から「県立大学は非常にリアクションがいい」と嬉しい評価をいただいています。それが県立大学の特徴であり、壁のない大学と思っただけのよう、成長させていかなければならないと考えています。

杉野会長：今後更に力を入れていただきたいですね。失礼かもしれませんが、小規模な会社の社長さんには、大学に対してどこか遠慮が見られます。遠慮は無用だと申し上げていますが、窓口が分からないというだけで億劫になってしまうようです。

前澤学長：私も同様の経験があります。窓口である地域連携センターにはコーディネーターがおり、企業の課題に応じて適切な教員を紹介してくれます。そういったところをもっとPRしていかなければいけませんね。

杉野会長：例えば、商工会や商工会議所など企業が集まる場にもっと教員の方々が出かければ、より相談件数は増えると思います。やはり教員の方々も大学から出なければいけません。私が好きな「現物・現物・現状」という3現主義に、是非取り組んでいただきたいと思います。そうすることで、より研究も深まると思います。

前澤学長：やはり「百聞は一見にしかず」ですね。現地に行ってみて、会い、話をする効果は非常に大きいと思います。何かに行き詰まって乗り越えたい時には特に効果的です。先程のお話にあった「知識の壁」は、このように乗り越えていくと良いですね。基礎的なことに取り組んでいる教員も、積極的に外に出て行くと違ってきますよ。

杉野会長：そうですね。交流により企業と大学のコミュニケーションレベルが上がります。社会ひいては国家発展のために大学はあるのですから。

前澤学長：しかし、一人の教員が産学連携・地域貢献・教育・研究、全てをこなすには、無理があります。例えば、ある教員は産学連携に力を入れており、別の教員は基礎研究をやっている、というように大学全体を見た時にバランスよく、いろんな活動をしていることが理想的ですね。

それから、大学の若い研究者を支援することも非常に大事です。それぞれの分野で力をつけていただきたいと思います。その力がなければ、産業界との連携にも限界があります。

杉野会長：そういう風に産学が力を合わせていけば、より素晴らしい大学になると思います。

教育改革 歴史を活かしながら今を変える

杉野会長：「賢者は歴史に学び、愚者は体験に学ぶ」と言います。今回の震災でもそうですが、教育においても歴史を紐解いて勉強に取り入れていくべきだと思います。

前澤学長：過去の経験を継承していくシステムは、整いつつあると考えています。例えば、航空機事故では技術的に問題があるところを解決し、再発しないように徹底的に分析するシステムがあります。今回の震災から学ぶことはたくさんあります。再度同じ被害が起きないようにどこまでできるかは、私達に突きつけられた課題です。

杉野会長：3.11の震災では、人的・経済的に大きな被害を受けました。この教訓を、一過性と捉えず、後世に継承していかなければなりません。原子力エネルギーの問題も、その研究に取り組むことで次のステ

ップに進んでいくことでしょ。学校教育も同様に、経験を教材にしていただきたいと思います。

前澤学長：学術分野では、時代の変化に伴って技術者や学生がシフトしていきます。その一方で、技術者が絶えては困る分野の研究が手薄になっていく傾向は、以前から問題視されてきました。大学としては、この部分にも力を入れていきたいと思っています。

杉野会長：今までの技術者は専門分野の知識だけで良かったのですが、最近に関連分野の知識も重要になってきました。これからは専門性を持ちながらも、他の分野の知識も合わせて学べる教育が必要となるでしょう。

前澤学長：中央教育審議会の大学部会でも、技術・工学分野の教育は4年間では足りないと言われていました。薬学や教育など、他の教育分野では6年制になりつつあります。また、「副専攻」という考え方もあり、私達が教育改革の中で取り組んでいかなければならない課題と考えています。

杉野会長：多くの分野を勉強するには、やはり5～8年は必要だと思いますね。



前澤学長：それと、各課程において修了時にどれだけ身につけておく必要があるか、はっきりさせていかなければなりません。

企業社会で活躍できる 骨太人材育成を目指して

前澤学長：大学では、人材育成において専門的な知識のほか、「学土力」に注目しています。例えば、コミュニケーションやプレゼンテーション技術、社会的な責任感や倫理観、自己管理能力や創造的思考力など、汎用的なスキルが挙げられます。現在のカリキュラムができてから社会情勢も変化しており、それらに大学は対応していかなければなりません。本学では、1年生から少人数のゼミを有効に活用しようとしています。

それから、人材育成という点では企業で活躍できる骨太な人材を育てる取り組みにも力を入れています。近年の少子化と豊かな社会背景から、非常に学生が弱くなってきています。なんとか強くしていかなければならないと考えています。

杉野会長：確かに様々な面で弱くなっていると感じています。国内だけでなく、国際的に取り組まなければいけません。ところで、ゼミにはどれくらいの時間をかけているのですか。

前澤学長：全授業科目の約10%弱ですが、卒業研究まで入れると、かなり大きな比率になります。

杉野会長：モノづくりの場合、類似品をかたち作ることはいくらでもできますが、新しいものを創造することは難しいことです。今の企業は、創造できるクリエイターやイノベーターを求めています。その人材が少ないと思います。

また、ゼミの手法では以前テレビ放映された、ハーバード大学のマイケル・サンデル教授の授業形態、学生に質問を投げかけ、即答させるという手法は良かったと思います。教授がされる質問も非常にいい質問で、あの時間、学生は物凄く頭、脳を集中させていますね。暗黙知の思想も加味して、そういう対話を学生とされるとう良いのではないのでしょうか。

前澤学長：ゼミの取り組み方も見直していきたいと思います。大学も効率的に効果(成果)を上げていかなければなりません。ところで、最近暗黙知が崩れかけているという話を聞きますが、どうお考えですか？

杉野会長：確かに、暗黙知にも取り組まなければならぬという話があります。それは、「ああ」と言えば「そう」と応えるような職人芸、勘といった暗黙知が通じなくなっているからです。パソコンに頼りすぎるあまり、思考やコミュニケーションが貧弱になってきているのではないのでしょうか。

前澤学長：これは私の考えですが、若者が脆弱になってきているのは、切確琢磨して遊ばないからではないでしょうか。子どもは、外で友達と遊んだ経験から強く育っていくと考えています。テレビゲームばかりしていると、対人関係の経験がなくなってしまう分、強くなれないのです。

杉野会長：いろんなことに興奮して取り組みました。近年、そういうことがなくなってきています。様々な分野で遊ぶ(興味を持って取り組む)これも大事な骨太教育の一つでしょうね。

前澤学長：こういうことは小中学校教育の中で育てられてきましたが、今は大学でやらなければいけなくなっています。これからは人間教育の部分も、ウエイトをおいかなければいけない時代だと思います。